

第2章

名詞、代名詞と 冠詞、単数複数

名詞で例外と言え、最初に思い浮かぶのは不規則な形をした複数形ではないでしょうか？ man → men や child → children といったよく見かけるものから始まって、louse (しらみ) → lice、ox (雄牛) → oxen といった動物名や、語尾ではなく語中が変化する、goose (ガチョウ) → geese、さらに passer-by (通行人) → passers-by とか、looker-on (傍観者) → lookers-on といった複合語は、私も高校時代に必死に記憶した覚えがあります。しかし、a woman politician (女性政治家) を複数形にすると、politician に s がつくだけでなく、前の woman も複数形になって women politicians となる (→ p.102) ということを知ったのは教師になってからでした。また、an estimated two thousand dollars のように複数形の名詞に a(n) がつくこと (→ p.109) も人から指摘されるまで気がつきませんでした。こうした名詞や冠詞、数にまつわる話をこの章では扱いたいと思います。

2-1 形容詞 + something

— *that something* の意味は？

something の前に形容詞を置くと

something を代表とする -thing で終わる語 (anything, nothing, everything など) は不定代名詞と言われ、形容詞で修飾する場合、その形容詞は1語であっても、後ろに置くのが原則です。

(1) Give me **something** cold. (何か冷たいものをください)

☞ (×) cold something とは言わない

ところが something には名詞で「(ちょっとした)もの」という意味があります。次のようなフレーズでよく使われます。

(2) I got you *a little something*.

(君にちょっとした物を買ってきたんだ)

(3) Here's *a little something* for you.

(これつまらない物だけど、どうぞ)

この場合、something は可算名詞で、最初の a は冠詞、little が形容詞で something にかかっています。このように something が名詞で使われているときは、それを修飾する形容詞は前に置いています。

ただし、something の前に置かれる形容詞が上にあげた little のような、いかにも形容詞に見える単語であれば問題ないのですが、さまざまな品詞の可能性のある単語が置かれているときは、それがわかりづらい場合があります。以下の英文は、企業がどのような人材を大学に求めているのかを述べた、入試問題の一節です。

We can train our own managers, or journalists, or software specialists, but we must have someone to train first, and **that someone** must be able to think, to digest knowledge, to express judgement clearly and concisely. (一橋大)

2行目の that someone の that はどんな働きをしているのでしょうか？ that という語は、代名詞、接続詞、形容詞、副詞等、さまざまな用法があり、ちょっと迷ってしまいますね。ここでの that は指示形容詞で、次のような用法の that と同じです。

(4) The first thing you should do after being bitten by a dog is find out who **that dog** belongs to.

(犬に噛まれた後に最初にすべきことは、その犬の所有者が誰なのかを見つけ出すことである)

本問の that も、直前で someone が登場し、その someone が that が指して「その someone は」という意味で使われている指示形容詞です。以下に類例を示しておきます。

(5) Love someone, and **that someone** will love you back.

(誰かを愛しなさい。そうすればその誰かもあなたのことを愛してくれます)

上の英文では、have someone to train first ... という部分の someone を直後で繰り返し、前に that を置いて that someone (その人) という意味を表しています。意味は「我が社では、管理職でも、ジャーナリストでも、ソフトウェアのスペシャリストでも研修が可能だが、まず研修の対象となる人材がいなければならず、そしてその人材は、物を考え、知識を消化し、判断を明確かつ簡潔に表現できなければならない」となります。

同様の用法が、最初に登場した **something** にもあります。

- (6) I had to say something, but **that something** didn't come out.

(私は何かを言う必要があったのだが、その『何か』が(口から)出て来なかった)

一般的に、不定代名詞が名詞として使われると、冠詞がついたり、形容詞で前から修飾することが可能になります。たとえば、英語の **nobody** は不定代名詞として、

- (7) There was **nobody** there. (そこには誰もいなかった)

のように使われますが、他に、名詞で「取るに足らない人物; 無名の人」という意味があります。その場合は、

- (8) He was **a nobody** when he was twenty.

(彼は二十歳の頃は無名だった)

のように **a** がつきます。

さらにちょっと面白い例を紹介しましょう。町で夫が見知らぬ女性と親しそうに挨拶を交わしたのを見た妻が、関係を怪しんで「今あなたが挨拶したの誰なの?」と夫に尋ねます。そんなとき、夫が「いや...、別に誰でもないよ」と言ったりしますが、このやりとりを英語で言うと、

- (9) “Who's that?” “Uh ... it's **nobody**.”

(「あの人、誰なの?」「ええっと、誰でもないよ」)

のように **nobody** を使います。私が大学時代、よくラジオの FEN

(現在の AFN) で聞いていた *American TOP 40* で、*Sylvia* という歌手の *Nobody* というヒット曲があり、その歌詞の中に、“Your Nobody called today.” という一節がありました。これは、夫の浮気を疑っている女性が、男性に向かって「あなたがいつも『誰でもないよ』と知っているその『誰でもない』人から今日電話があったわよ」と皮肉めいて言っている場面を唄っています。**Nobody** に **your** という所有格がついて **your Nobody** と言う表現が面白いなと思いつつ、ラジオに耳を傾けていた大学生時代が懐かしいです。

